

## 〈『神学大全』 翻訳完成記念特集〉

### スンマの翻訳に加わって

---

松 根 伸 治

もう二十年以上前の学部生のころ、京都河原町通りの古書店で『神学大全』第Ⅰ部にあたる八冊揃いの邦訳を購入したことはよく憶えている。学生の身にはけっして安くない買い物だったが、重たい本を持ち帰って本棚に並べたときはうれしかった。大学院に進んで中世哲学を研究分野にしようと決めてはいたものの、勉強を始めたばかりで、当時は自分がこの翻訳の仕事に参加することになるとは思ってもみなかった。その後、すでに刊行されていた他の箇所を少しずつ買い求め、あるいは出版を楽しむに新刊を購入してきた創文社の『神学大全』（背表紙の金文字はおごそかに「神學」）は、ついに全冊が完結し、ほとんど1メートルに達する横幅で書架に並んでいる。

こころみに邦訳の頁を数えてみた。第Ⅰ部（第1～8冊）が全2,851頁、第Ⅱ部-I（第9～14冊）2,630頁、第Ⅱ部-II（第15～24冊）3,992頁、そして第Ⅲ部（第25～45冊）が3,939頁。総頁数は13,412頁である。（訳者註・解説などを含み、目次と索引を除く頁数。）私が関わったのは膨大な全体のごくわずかにすぎないが、せっかく与えられた機会なので、すこし私事も含めて翻訳を通じて考えたことを述べてみたい。

#### 渋谷克美先生のこと

『神学大全』第21冊（第Ⅱ部-II・第123～150問）の一部を翻訳するよう渋谷克美先生を通じてお話をいただいたのは、ちょうど初めての就職が決まったころだった。任地での仕事は慣れないことが多く、翻訳作

業に費やすことのできる時間を作ることはなかなか難しかった。その後職場が変わり、作業の見通しがついてきて先生とも何度か連絡をとりあったりお会いしたりしていた。だが、まったく考えもしなかったことに、2009年12月9日、渋谷先生が61歳で急逝された（当時・愛知教育大学教授）。

スポーツ好きでお元気な日頃の姿を存じあげていたので、信じられないという印象がしばらく消えなかった。学会や研究会でテキストを机に広げノートをつけていらっしやる姿と熱心に質問をなさる声を今もよく思い出す。すでに、オッカム『大論理学』註解という大きな仕事を完成され（五分冊、1999-2005年、創文社）、当時さらに、オッカム『七巻本自由討論集』註解の仕事を進めていらっしやる最中だった（三分冊、2007-2008年、知泉書館）。スンマのほうは、ご担当分の124問と141問から147問の途中までの原稿はすでに数度の校正も済んでいた。渋谷先生の関心の中心は14世紀の哲学、特にオッカムの論理学や認識論にあったと思うが、なにごとにも全力投球の先生はトマスの倫理思想についても翻訳のために入念な下調べと検討をなさっていた。以前に第22冊（第Ⅱ部-Ⅱ・第151~170問）を翻訳されていたので、二冊の関係や一貫性をとくに考えておられたようである。

私はももとの分担箇所を完成を急ぐと同時に、残された147問以降を引き受けることになった。基本的な訳語の統一とお互いの訳文の確認はおこなっていたが、最終的には先生の原稿にも最小限の変更を加えて全体の統一をはかった。細部の照合や索引作りにも思った以上の時間がかかり、出版は予定よりもずいぶん遅れてしまった。仕事を仕上げることを渋谷先生はご出身の秋田の言葉で、「(仕事を)でかす」とおっしゃっていたが、できあがった本をご覧になったら、どう言われただろうか。論理をうまく表現できなかった箇所に再考をうながされたかもしれないし、軽薄に流れがちな私の訳文に注意をなされたかもしれない。だが、「やっとできたね」と笑ってくださるような気もする。

創文社編集部の松田真理子さんが最初から最後まで真摯にサポートしてくださったおかげで、かろうじて任を果たすことができたことを今あらためて感謝している。また、稲垣良典先生に校正刷りの一部を読んでいただき有益なご指摘を頂戴したことも、訳文を練り直して全体を完成

させるうえで非常に励みになった。日頃はもっぱら読む側の人間である自分にとって、一冊の本を作り上げるのに多くの人の熱意と労力が積み重ねられていることを実感できたことは貴重な経験だった。この翻訳の仕事に参加してあらためて感じるのは、他のそれぞれの分冊にも訳者や編集者のさまざまな苦労や思いがあっただろうということである。そう思うと完結した翻訳の全体が、いっそう不思議なありがたみをおびて見える。

### 『神学大全』第Ⅱ部-Ⅱの魅力

トマス自身の言葉によると、『神学大全』第Ⅱ部で論じられる主題は「理性的被造物の神への運動」（第Ⅰ部第2問導入部；邦訳第1冊34頁）、あるいは、「神のかたどり・神の像としての人間」（第Ⅱ部-Ⅰ序言；第9冊1頁）である。分量としてはスンマの半分をしめる第Ⅱ部でトマスがおこなったことを簡潔にまとめれば、「人生の究極目的と、徳および悪徳についての考察」（第Ⅲ部序言；第25冊1頁）だった。

第Ⅱ部-Ⅱは「徳」という観点から全体が組み立てられている。「道徳の全対象領域を諸々の徳の考察へと還元した上で、これら徳のすべてをさらに七つに還元しなければならない」（第Ⅱ部-Ⅱ序言；第15冊2頁）とトマスは述べ、信仰・希望・愛という対神徳と、思慮・正義・勇気・節制の枢要徳を骨格にすえた徳の倫理学の構想を宣言する。これら七つの主要な徳自体に関する考察が論の中核であることはもちろんだが、それらに関連づけて道徳のじつに多様な側面が論じられている。

上記の主要な徳に関連するものとして、さまざまな種類の徳や行為が位置づけられる。無作為に例をあげてみると、平和（29問）、憐れみ（30問）、敬神（81問）、祈り（83問）、従順（104問）、殉教（124問）、高邁（129問）、大度量（134問）、忍耐（136問）、純潔（152問）、寛容（157問）、謙遜（161問）、……。聖書的な徳に加え、やや異質な思想史的の出自をもつものをも、トマスはそれぞれあるべき場所に配して諸徳のネットワークを編み上げている。また、『イザヤ書』第11章に由来する聖霊の七つの「賜物」と、聖書におけるさまざまな「掟」が、やはり主要な徳との関連において考察される。さらに、諸々の悪徳や罪も、柱となる七つの徳に対立するものとして位置づけられている。トマスは個々

の悪徳のいわば本質がどこにあるかを論じ、それらを注意深く配置した。たとえば、七つの「罪源」は次にあげる箇所それぞれ議論されることになる。慵懶 (35 問), 嫉妬 (36 問), 貪欲 (118 問), 虚栄心 (132 問), 貪食 (148 問), 淫蕩 (153・154 問), 怒り (158 問), 高慢 (162 問)。(高慢は罪源に含める場合もあれば別格あつかいされることもある。)

それぞれのことがらをどの徳に関連づけて整理するかはかならずしも単純ではない。なぜなら、聖書的背景をもつ三つの対神徳 (文言として明確なのは『コリント前書』13,13) と、ギリシャ以来の伝統 (プラトン~キケロ~アンブロシウス) を引き継ぐ四つの枢要徳とが、そもそも思想的源泉を異にするだけでなく、これらの主要な徳と七つの罪源の系譜も直接的な関連をもっていないからである。しかしトマスは、複雑に交錯する思想の伝統を生かしながら、アリストテレス倫理学という強力な道具立てを持ち込み、大げさに言えばあらゆる徳と悪徳について探求しようとしている。そこでは、一見異質なもののどうしの本来的な関連を見抜く眼力と、それぞれの典拠の中心的意義を取り出し調停するバランス感覚が発揮される。

『神学大全』第Ⅱ部-Ⅱは、もしかしたらある人にとっては、徳と悪徳の名称が入り乱れる長大で退屈な目録に見えるかもしれない。たしかにトマスの筆致にはモラリスト風の鮮やかさや跳躍するような意外性はない。しかし、個々の論点をねばり強く叙述する言葉をじっくり味わうと、説得的な関連づけと区分の方法を用いて、多種多様な思想的脈絡それぞれの核心部が抽出され結晶化されていく現場に立ちあうことができる。理論や方法の首尾一貫性に加え、とりわけ第Ⅱ部-Ⅱの文章には、人間心理に関する洞察とキリスト教の具体的な文化の反映が多く見出されることも魅力だろう。第Ⅱ部-Ⅰにおける理論的枠組みが、ここで血の通った具体性をそなえて描き出されているわけで、その意味でやはり、第Ⅱ部-Ⅰと第Ⅱ部-Ⅱのどちらが欠けてもトマスの倫理想は成り立たない。

### 日本語で読む人のために

中世哲学の専門家だけでなく、他の分野の研究者や一般の読者に日本語訳の『神学大全』をさらに読んでもらうためにできそうなことを最後

に考えてみたい。第一に、スンマは「一冊の本」としてはやはり大きすぎる。一般向けには日本語のダイジェスト版があってもよいのではないだろうか。だが、マニュアル化してしまっただけでは魅力が失われるし、異論・反対異論・主文・異論解答の組合せの妙もスンマを読む楽しさのひとつなので、主文の大事な部分だけを抜粋するというのも味気ない。箇所としてどこを選ぶかも悩ましい問題である。しかし、簡約版を読んで特定の主題やトマスの論じ方に興味をもった人が、もっと本格的に知るために創文社刊の各冊を手にとるということはあることだと思ふ。

第二は、どちらかと言えば研究者向けかもしれないが、索引の整備である。形式の統一された人名索引・用語索引・聖書引用索引が全冊に付してあるので、これらの情報がなんらかのかたちで一元化されれば有益だろう。あるラテン語の用語を日本語でどんなふうに訳す選択肢があるかを知りたい人のためには、『トマス・アクィナス『神学大全』語彙集（羅和）——創文社版、中央公論社版による』（長倉久子・蒔苗暢夫・大森正樹編、新世社、1988年）の後継となるような資料があれば便利にはずである。訳語の対応に加えて、重要な概念には簡潔な解説がついていればなお親切だが、これも実際に役立つものを作るとなると容易な作業ではなさそうである。ともかく『神学大全』の全体が日本語で読めるようになった。このことだけでも、トマスの面白さを知る人はきっと増えるにちがいない。